スキー

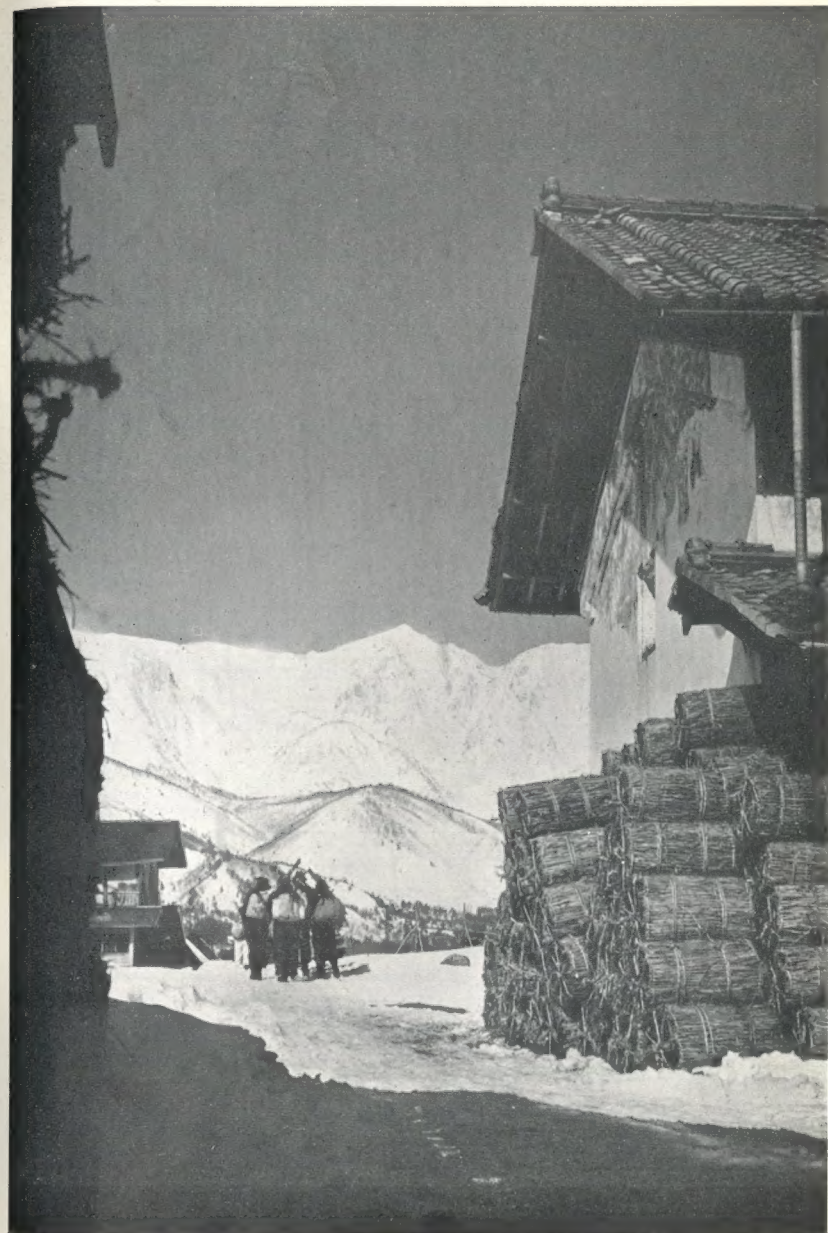
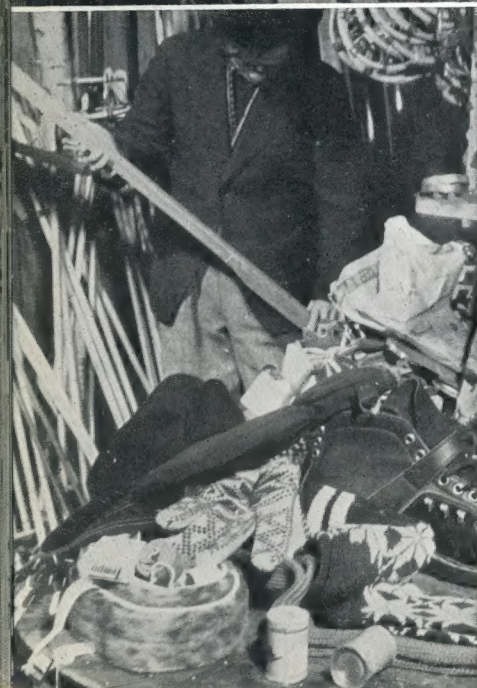
岩波写真文庫 26

岩波写眞文庫 26 スキー

編集 岩波書店編集部
写眞 日本山岳写眞協会 岩波映画製作所

わが国ではいわゆる雪国が半分近くをしめているにかかわらず、スキーは外国から輸入されるまで使われていなかった。それまで雪国の人は暗い雪の冬をじっと過すほかはなく、外を歩くにはカンジキが唯一の頼りだった。今でも大半の雪国はそうだろう。しかしその暗い冬を明かるいものに変えつつあるのがスキーだといわれている。スキーのおかげで雪国は快活になり青年の体格まで変わったという。これは雪国の多い日本にはうれしいことである。私たちはスキーが健康なスポーツとして発展するとともに、雪国の生活にもっと利用されることを、願わずにはいられない。

目次

定価100円 1951年2月25日 第1刷発行 1958年1月20日 第9刷発行 © 発行者 岩波雄二郎 印刷者 米屋勇 印刷所 東京都港区芝浦2ノ1 半七写真印刷工業株式会社 製本所 永井製本所 発行所 東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3 株式会社岩波書店

秋が深くなって、高い山のいただきに白い雪がチラホラと見えはじめると、スキーヤーの雪への郷愁がまたよみがえってくる。やがて都会のデパートや運動具店に、スキーが林のように並べられるころには、大陸からの寒波がわが國に雪を運び、待望のスキーシーズンがやってくる。それから三月までのあいだ、わが國では一部の地方をのぞいて、全國のどこでも少し高いところへ出かければ、スキーを樂しむことができる。暖かい九州の阿蘇山の淡雪にさえ、ときにはスキーのシュプールがえがかれるほど、わが國は世界でも雪にめぐまれたところである。スキー場として宣傳されている場所だけでも五〇ちかくはあり、スキーはスケートとならんで、わが國のウィンタースポーツの華として、いいようのない魅力をもって人々をとらえる。スポーツとしてのスキーは現代のもので、まだ数十年の歴史しかもっていない。十九世紀のおわりに、ノルウェーではじめてスキー競技会が開かれたころがその開始期といわれ、それからスカンジナビア半島、イギリスを経て、中央ヨーロッパに傳えられ、それぞれの地方で独自の発達をとげた。一時は、いろいろの主張がスキー界をにぎわしたということだが、オーストリーの名手、シュナイダーが現われたころには、各派の長所がたがいに生かされ、スキーの魅力もしだいにスピードにおかれるようになった。現在では時速一〇〇キロ（ほぼ特急ツバメの速さ）は普通となり、速度記録をねらう特殊なレースでは、時速一五九キロの記録さえでているほどである。このスキーの高速化は、スキー専門家のあいだに、スキー技術の理論や方法について多くの議論の種をまいているが、そうした間にもスキーは大衆の健康なスポーツとして毎年ひじょうないきおいでひろまっている。すでに有史以前から北欧では生活用具に使われていたといわれるスキーが、こんなに人々を夢中にさせるスポーツになったのは、ふしぎなくらいだ。白銀の世界のあやしい魔力なのか、あるいは、雪煙をあげて滑るスピードの快感なのか。それはともかく、雪にめぐまれたわが國で、スキーが今後も発展をつづけることは、たしかであろう。

スキーに必要な道具

スキーは均質な弾力のある木材でつくられその長さは，立って手の先が先端にふれるくらいが標準とされる．外材のヒッコリーやアッシュなどのスキーは上質だが，高價(7000円以上)で，イタヤ．ミズナラなどの邦材なら2300円くらいからある．スキーの裏の溝は横すべりを少なくするためのもの．杖は竹製が普通で，600円くらい．立てると楽に腋の下に入るほどの長さが手ごろ．

靴にスキーをつけるには締具がいる．締具はスキー技術の進歩にともなっていろいろと改良されたが，カンダハーとよばれるものが最新式といわれている．上等のものは2000円以上もするが普通品は1000円見当．

締具は靴によく合わせてとりつけなくてはならない．これが合っていないと，いろいろの動作がスキーにそのとおり伝わらない．

スキー靴は丈夫で防水完全なこと，足によく合うこと(毛の靴下を2枚はいて)．底は締具をつけるために，厚く(2枚底)丈夫なことが必要．新調なら7000円前後はする．

その他の必要品．すべりを調節するワックス．紫外線よけ眼鏡．手袋．靴下．登行用シール(アザラシの皮)．防寒用具も入念に．

スキー場へ

冬の北風が，スキー場に雪をもたらしているのだと思うと，もう心が落ちつかない．12月のなかばから，なんべん靴に油をぬったことか．停車場の雪の報告が，だんだんと雪への焦躁をかりたてる．

都会のスキーヤーのために，シーズン中は週末などに特別の夜行列車やバスが出る．東京では上野からスキー客専用の列車が，多い時は3本も増発される．最近都心からスキー場までの直通バスも非常にふえた．雪のあるところまでゆきつくのが一苦労だったことも，いまは昔の語り草となった．

週末になれば，列車も自動車も，スキーヤーたちの楽しい夢をのせて，雪へ雪へと，走りつづける．

鉄道の終点には，スキー場行のバスが待っている．スキーをうしろに結びつけたバスは，滑り止めの鉄の鎖をひびかせて朝まだ早い雪の道を走りだす．

草わけ時代

レルヒ少佐

日本にはじめてスキーが伝来したのは1909年(明治44年)のこと．高田第13師団に着任した，オーストリアの見学将校，テオドル・フォン・レルヒ少佐によって伝えられた．

➡

レルヒ少佐はオーストリア式の一本杖スキー技術に長じていた．師団長長岡外史将軍とともに，まず軍人たちにその秘伝を伝授した．ついで一般の人も少佐から直接指導をうけた．写真は当時のスキー倶楽部の人たち．日本スキー術草わけの一齣．

⬅

がんじょうな長い一本杖を利用した廻転．「滑降中の右へ方向変換」．足でふんばり杖をたよりにした一本杖スキー術の一例．現代の高速度廻転技術など想像もできぬ時代．

雪国のスナップ

わが國のスキーは実生活のなかに育ってきたものではないので，生活との結びつきは，かならずしも広いとはいえない．しかし，鉄道や電信線の保守，営林署の活動にはなくてはならぬ冬の足であるし，またある地方のおまわりさんはスキーをつけて活躍しているという．

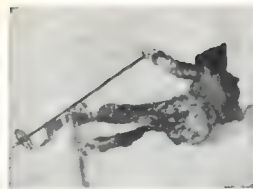
→カンジキは雪国を消極的にした．スキーはそれを積極的に変えるであろう．

→都会の郵便屋さんは，自転車でくる．雪国の郵便屋さんは，スキーでくる．

→往診にゆくお医者様．雪のなかを苦労していっても，往診料は都会と同額．

←雪国の子供たちは小さいころから遊ぶのにもお使いに行くにも，スキーをつける．ゴム長にちょっとひっかけ手がるに滑っている．この子供たちが大人になったとき雪国の生活はどんなに明かるくなっていることであろう．

灌木を切りはらった山の斜面に，ブッシュを埋めつくした銀一色．スキーヤーがゲレンデとよぶスキーの練習場である．シーズンも盛りになると，菅平や湯沢などの有名なスキー場は，宿がなくて追いかえされる人がでるほどの盛況をみせる．多くの人々がゲレンデの雪にまみれて展開する雰囲気は何か夏の海水浴場を思わせるものがある．

スイスをはじめとしてヨーロッパのスキー場はじつによく設備がととのっている．すばらしい山小屋．斜面を高い所まで運んでくれるリフト．ゲレンデは健康な冬の社交場なのである．日本でも最近リフトがしだいに新設され，貸スキーなども多いところでは5000台（使用料1日150円くらい）も用意されているが，ミカンの皮などでよごれたゲレンデでは，社交場どころではない．

ゲレンデの一風景

滑るためのスキーも初心者にとってはやっかいな存在である．斜面を滑ったことのない人は，とかく腰をうしろに引きたがり，スキーにおそるおそるついてゆく．スキーは斜面にのれば，いやおうなしにスピードをあげる．オッカナビックリの姿勢は，スキーからおいてきぼりをくい，雪面にオシリの大穴をあけてしまう．

いっぺん転ぶと，おきあがるのがまた自由にならない．スキーは後滑りする．股もさけよとばかりに左右へ左右へとひろがる．しかし，人前などをかまってはいけない．転んでは滑り，滑っては転ぶのである．おそくても1日くらいたてば，雪にもスキーにも馴れ，ゆるやかな斜面なら，一応すべれるようになるだろう．

ス キ ー 場 の 追 想

➡ 鉄道の，しゃれたスキー小屋．農閑期の素朴な民家．あかあかと燃えるストーブの薪．暖かい汁粉．農家のおばさんがだしてくれた古漬けの味．あのかっこうは傑作だったぞとうち興じる一休み．スキーとともに忘れられぬ小屋の追憶．

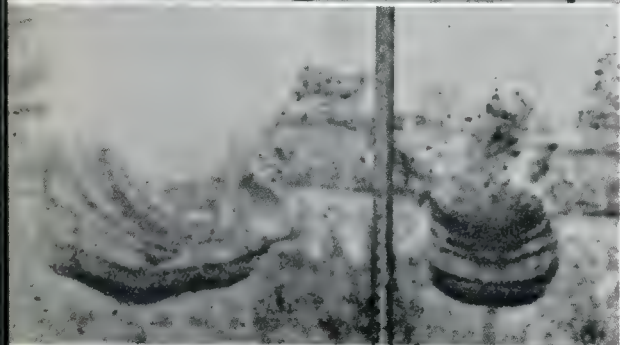
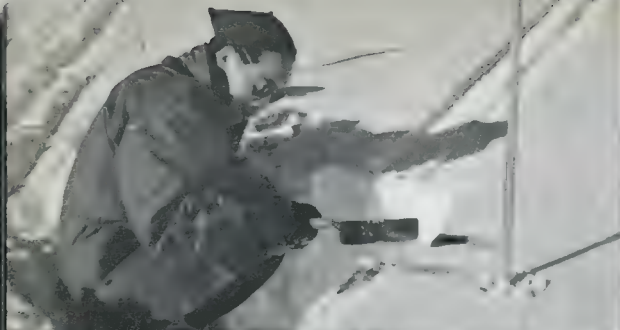
➡ スキー宿の乾燥室．ストーブが一晩中もえている．湿った着物を乾かして，また明日だ．

➡ 身支度は一人前だが，腕前のほうは，リフトから下りてすべってもらわないと解らない．

ス キ ー 学 校

スキー場ではスキー学校が開校．初級，中級，上級，技倆に応じてスキーの技術を講習する．期間は5日から1週間くらい．

初めがだいじだ，という昔の諺が，スキーほどよくあてはまるものはない．いっぺんついた悪いクセは，なかなかなおらない．よいコーチのもとで，すなおに訓練されることがやはりスキー上達の近道．

スキーの科学

← 雪はいくつもの層をなして積もっている．そこでソリやスキーの通ったあと，雪面を垂直に切って層の変化をみれば，すべるときの機構がよく解る．

← ソリが通ったあとの断面．火をたいて暖めると，層によって，とけた水の含みかたが違うので，雪の層がはっきり目に見える．

← スキーの通ったあとの断面．足の力の入れかたにより，圧縮の状態がいろいろ違っている．左は廻転しながらすべったあと．

← スキーの通ったあとの横の断面．黒く見えるのはあらかじめ雪のなかに薄くまっすぐに入れてあったスス．これがスキーの進行方向に移動していることは，スキーとともにすぐ下の雪が滑った証拠である．スキーが滑るのは，表面近くの雪粉がずれるためといわれている．

1） 雪の上を歩こうとすれば，からだの重みで足は雪のなかに沈む．深い新雪だと，胸ぐらいまで入ってしまうこともめずらしくない．雪は人間のからだを支えてはくれない．
2） しかし，スキーをはいていれば，ウサギよりも雪に沈まないで歩くことができる．これは広い面積に体重が平均してかかることになるからである．スキーの中央部に，上向きの反りがつけられてあるのも，体重が足の下にばかりかからないようにするためである．
3） からだのバランスさえよくたもっていれば，スキーの上でこのような姿勢もとれる．スキーは滑らず止まっている．雪は思ったよりスキーにくっつく性質をもっているのだ．
4） スキーを雪面に平らにおいていれば，まっすぐに滑るだけで廻転はしない．スキーのカドを立てて，スキー面を雪面にななめにすれば，はじめて廻転のきっかけが生じる．

スキーで歩く

◆スキー術のABCはとにかく歩くことからはじまる．歩くといっても，この長い二本のスキーをゲタのようにふみ歩いているのでは，すぐ疲れてしまう．交互に前へ前へと滑らせてゆく．両方の杖て軽く雪面をおしながら，右足に体重をかけて右のスキーを滑らせ，左足に体重を移して左のスキーをすべらせる簡単な要領．

◆歩くときにいきおいをつけて，3歩目に両スキーをそろえ，杖を前方につき，腕の力で一こぎする．2歩目に両足をそろえてこいでもよい．この動作をくりかえして雪原を滑走してゆくこともできる．

◆スケートのように両足を交互にだし，片方のスキーだけですべることもできる．上体を右に左にふりながら身を沈めては雪を蹴ってゆく．軽快なテンポにのった楽しい滑走．

スキーで登る

急斜面はななめやジグザグに登れば楽だ．しかし狭い急斜面をまっすぐに登るときには，そうはいかない．両スキーをカドづけしながら，足ぶみするように一歩一歩，横ばいに登る．どんな斜面でもこれで一応こなせるがじつに骨のおれる労働だ．

斜面に向かって両スキーを開き交互に雪面にカドを立てつつ登ってもよい．開く角度がせまかったりカドの立てかたが足りなかったりすると，登ろうと欲する意志とは反対にスキーのほうはかってに後滑りしてしまうだろう．

滑るためには登らなければならない．登ることも技術の一つである．ゆるい斜面ならば平地と同じ調子で登れる．後滑りが大きければ，雪面をたたきつけるようにしてスキーに雪をくっつける．ワックスさえぬってあれば，この要領でかなりの傾斜もこなし得る．

方　向　変　換

スキーをはいてしまうと右むけ右も，左むけ左も，まわれ右も，地面の上のようなぐあいにはいかない．そこでスキーでの方向変換を心得ていなければ，斜面をジグザグに登ることもできない．とまどいしているうちに思わぬ方向に滑りだしたり転倒したりすることもある．

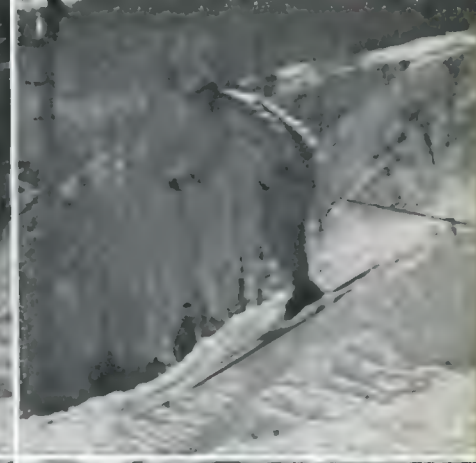
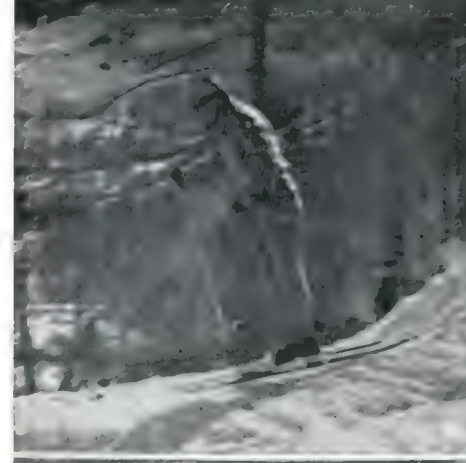
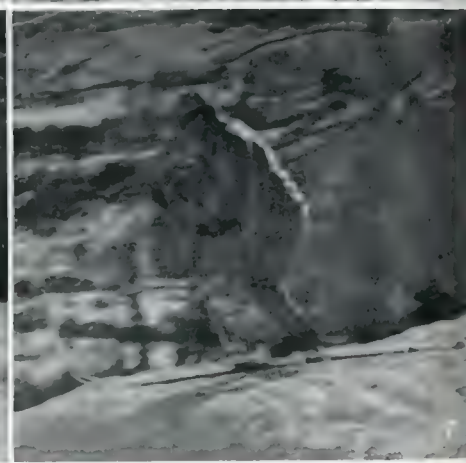
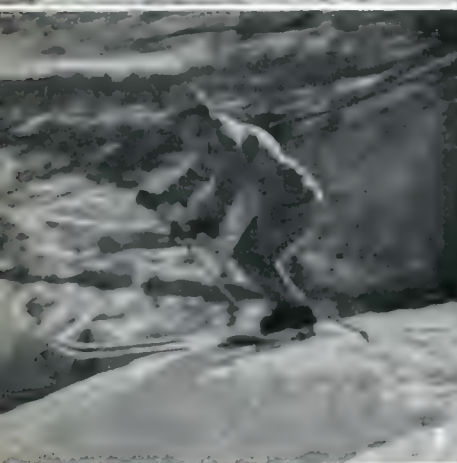
方向変換の要領．まずまわろうとする側のスキーを高く蹴りあげる．そのまま末端を雪面に立てて新しい向きに倒す．体重は両杖と反対側のスキーとにかける．次いでからだを新しい向きのスキーに移す．と同時に，からだの向きをかえ，他のスキーをややあげてまわし新しい向きにそろえよう．

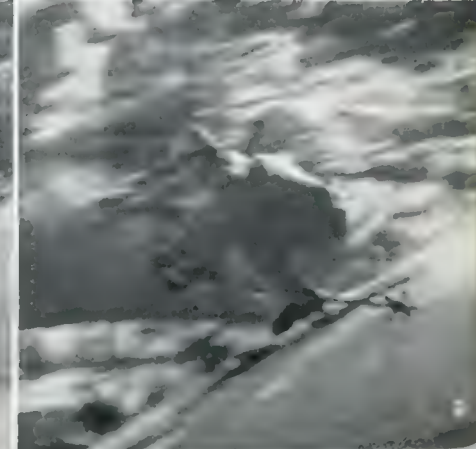
交叉するシュプール(スキーの跡). スキーヤーたちの技倆が, 雪面にきざまれてゆく.

直　滑　降

斜面をまっすぐに滑りおりる直滑降．あらゆるスキーの技術の基礎．そのスピードに馴れることが，スキー上達の第一歩．時速30～40 km のスピードには，すぐに馴れる．

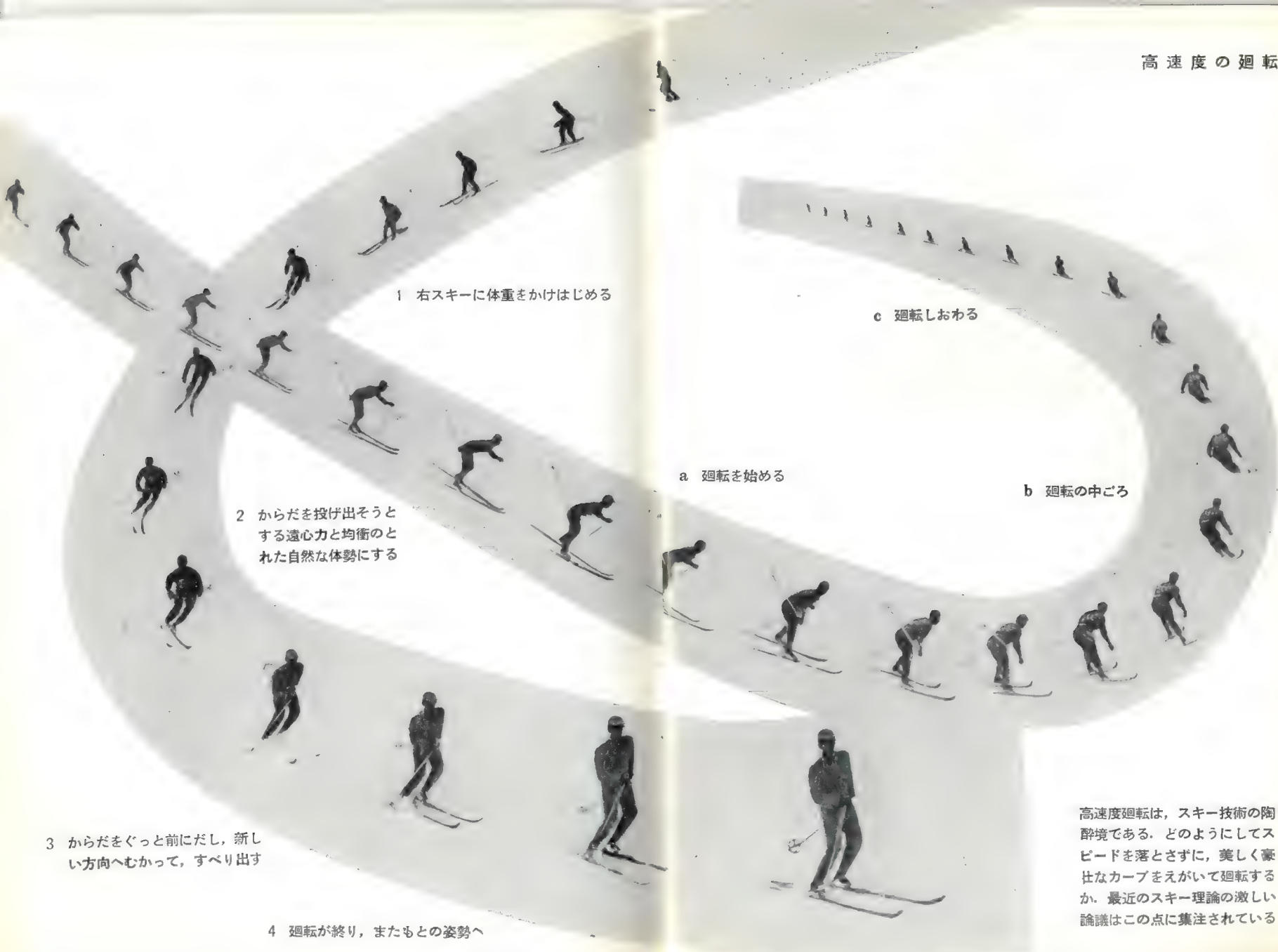
→昔はホッケ姿勢といって，しゃがみこんだ姿勢で直滑降した．重心が低いから，安定はたもちやすいだろうが，スピードに追いつけず，急な動作がとりにくい．今はむしろ，まっすぐに立ったまま，からだを前へ倒して(前傾して)，からだでスキーをひきずってゆくような姿勢がとられる．短距離のランニングで，からだが先にでて，足がうしろで地面を蹴っている感じだ．スピードのある場合には，このほうがはるかに安定して，臨機応変の体勢だといわれている．

←斜面を登って，いざ滑降するだんになると誰も初めは当惑してしまう．両杖で滑りをおさえ，スキーをΛ型に開きつつ，向きを変える．足をふんばり，つっぱった形．スキーをそろえ，杖で一おしした瞬間，からだは前傾し，スキーをひっぱって滑りだす．

波をうった斜面を滑らせてみると，どのくらいスキーになじんでいるかがよく解る．くぼみにかかって傾斜が急になるたびに，前傾し重心を前へ移して，スキーにおくれないように，とっさに処理しなければならない．また，凹凸の斜面からくる衝撃を，ヒザにはずみをつけて，いなすことも必要である．うまいスキーヤーをみていると，ヒザから下だけがバネのように上下して，からだは斜面に沿って，じつに静かに滑りおりていく．

スキーのスピードに馴れないうちは，ともすれば本能的な恐怖心から，からだを引こうとする．もともと，人間の反射的な運動はスキーのスピードにくらべれば鈍重なのだからしかたがないが，それでは斜面が急変したときスキーについてゆけない．むしろ思いきりからだを先にのりださせ，スキーをひっぱってゆくような姿勢が望ましい．このための訓練に，熱いものにさわったとき手をひっこめず逆に手をのばすという練習をした人もあるほどで，スキーヤーにとってこれはかくことのできない要件であるといわれる．

斜　滑　降

斜面をななめに滑りおりる斜滑降．からだはやはり前傾する．そして横すべりしないようにスキーの山側のカドをわずかに雪面に立て，ヒザをいくぶん山側に倒して，スキーをおさえつける．この姿勢では体重は自然と谷側のスキーにかかるだろう．ヒザを山側によせても，上半身は軽く谷側へ倒す(外傾)．これは重心をスキーからそらさないためである．これと前傾とが組み合わされて，谷をのぞきこむような姿勢ができあがる．はじめのうちは誰でもこわがってしまって，上体を山側へねかせようとする．しかし，それではかえってスリップしやすいから危険であろう．前傾してスピードに馴れるとともに，外傾して斜面に馴れることは，高度の廻転技術にすすむ要件である．

スキーをつっぱって雪面の抵抗を変え，スキーの速度を調節することもできる．直滑降してきた場合，両スキーの先端をつけたままΛ型に開き，スキー面を雪面に傾ける．抵抗が大きくなり，速度は落ち，止まってしまうこともある．そしてこのような形をとりつつ，交互に両スキーに体重を移しながら，右に左に廻転をつづけることもできる．直滑降からこの技術に入るのが本道だとか，あるいは，たとえ速度の調節に便利でも，この技術にたよると，つっぱるくせがついて悪いとか，いろいろとやかましい議論がある

スキー場でひろった一風景．くぼ地をみごと飛んだと思ったら，着陸するはずみにバランスがくずれた．からだのバランスは，スキーの速さが早くなればなるほど必要である．

1　右スキーに体重をかけはじめる

2　からだを投げ出そうとする遠心力と均衡のとれた自然な体勢にする

3　からだをぐっと前にだし，新しい方向へむかって，すべり出す

4　廻転が終り，またもとの姿勢へ

a　廻転を始める

b　廻転の中ごろ

c　廻転しおわる

高速度廻転は，スキー技術の陶酔境である．どのようにしてスピードを落とさずに，美しく豪壮なカーブをえがいて廻転するか．最近のスキー理論の激しい論議はこの点に集注されている

スキーで廻転する

スキーの廻転を分解すれば，だいたい3期にわけられる．自動車に例えてみれば，第1期では，ぐんぐんと順の方向にハンドルをまわして廻転をはじめる．そのままハンドルをたもって，廻転を進めるのが第2期．ハンドルを逆にもどして，新しい方向へ自動車を向けきるのが，第3期にあたるわけ．

第1期．斜面をななめに滑降してきて廻転する場合には，山側のスキーに体重をかけつつ，スキーのカドをそれまでと逆に立て雪面を斜めにおさえつけるようにする．バランスを保つために，下半身は谷側へ倒す．慣性をもったからだは逆に雪面からおしかえされ，まわろうとする力が働く．これを助けてからだを廻転方向に振りこみ始める．

第2期．遠心力が大きく働いて，からだは前方へほうりだされそうになる．これに耐えるため，廻転弧の内側に下半身をたおす．しかし上半身はしいて遠心力にさからわずすなおに谷側へたおす．スキーはやがて最大傾斜を通過し速度を速める．しかし安定は十分だ．自然にスキーをひきずってゆく．

第3期．内側のスキーを完全にひきつけて姿勢はもとの形にもどされる．ただ無理してまわろうとしたり，遠心力を警戒しすぎて，からだが円弧の内側に傾いていすぎると，第3期でたちなおることがむずかしい．

↑
滑ってくるいきおいを利用してジャンプしてまわる．前傾をまし腰を沈めつつ，両杖をスキーの片側前方へつきたてる．と同時に両足でふみきって，スキーをあげ，杖にのりかかって廻転してゆく．ふみきったときの力の余力や遠心力をすなおに利用してまわる，

↖
滑降している途中で，よくちょっとした凹地や小川にぶつかる．このときは両杖で雪面をついて飛びこえる．踏み切り，スピード，バランスが一体となった美しく豪快な技術．

←
両杖をスキーの両側についたまま，ジャンプして向きを変えることもできる．じっさいには，ほとんど使われないが，ふみきった力をうまく利用するゲレンデのトレーニング．

スキー競技

スキーの技術が進歩し複雑になってくるにつれ，その競技も細分され，現在では，正式な国際競技の種目になっているものだけでも10種を数えている．(1)は新複合競技．滑降と廻転を組み合わせたもの．得点のチャンスが多いので実力がものをいう競技だが得点計算のむずかしいのが難点．(2)はリレー．1人が約10 kmを滑走し3人から5人のチームで競走する．滑走競技にはこのほか長距離(15～18 km)，耐久(30～60km)があるが，どれも走路には平地，登行，滑降が等分になるように適当に組み合わされている．勝負を決するのは全コースを滑走するタイム．(3)は滑降競技．きめられた斜面を滑降してタイムを競う．走路の條件はふつう全長約4000m，標高差約800m．(4)は廻転競技．適当な斜面を選んで30から40くらいの旗の関門を作る．競技者はこれらの旗の間をぬってすべりその所要時間を争う．スピードを落とさずに廻転する技術の優劣の競争．

スキージャンプ

➡ ジャンプ競技では飛距離とフォームが問題. 飛距離はシャンツェ（飛躍台）によって違うが, 世界での記録は 138 m（スエーデンのダン・ネッツェル選手）. 競技用シャンツェは, ふつう 80 m 前後の飛距離を標準にして作る.

➡ シャンツェの着陸斜面は着陸時のショックを緩和するため, 普通 30～40 度の傾斜をつけ, 雪面をよくふみかためる. 数字板は飛距離を測定するもの.

⬅ 後楽園野球場. 貨車 54 台分の雪が持ちこまれた. 東京の暖かさにとけかかるシャンツェで, 日本の名選手が飛技を披露した.

⬅ ジャンプ用スキーはやや幅ひろく重い. 真直に助走するため裏の溝は3本.

写眞提供　水上久氏

国際スキー競技は戦争で空白だったが 1946 年には世界選手権大会が復活し，1948 年にはサンモリッツ(スイス)で 12 年ぶりの第 5 回冬季オリンピック大会が開かれた．この大会でもノルウェーはあいかわらずジャンプ競技に強味を見せ，3 位までを独占．距離競走ではスエーデンが他を圧し，2 種目優勝，長距離の 3 位までを獲得した．(1) は各国選手の入場式．(2) は男子滑降，新複合競技に優勝したフランスのアンリ・オレイュ選手．日本選手はこの大会に参加できなかったが，1936 年の前大会(ドイツ，ガルミッシュ)ではジャンプ競技に伊黒選手が 7 位，龍田選手は参加者中の最長距離 77m を飛ぶなど好成績を残した．1952年にはオスロー(ノルウェー)で第 6 回大会が開催された．日本選手も 16 年ぶりに参加し，猪谷選手などが活躍した．(3)はその時のジャンプ競技場．

スキーツァー

スキーに馴れるにつれてスキーヤーは冬山の神秘な魅力にとりつかれてゆく．しかし，美しく静まりかえった銀世界もいったん急変すれば，荒れ狂う白魔と化す．この殿堂をうかがうには，スキー技術はもちろん，十分な準備と細心の注意が必要である．予備の食料，着がえ類，スキー用具の予備品や修繕具も忘れずに持ってゆかねばならない．

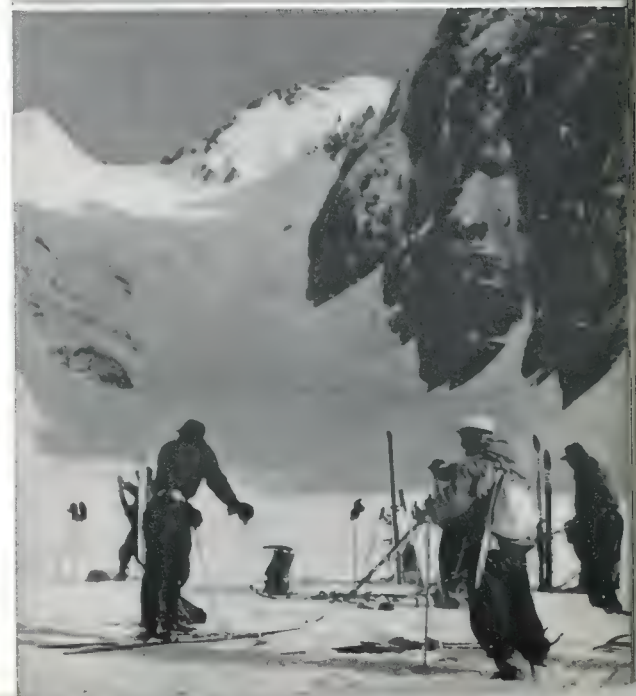
山スキーの楽しさは豪快な滑降ばかりでない．頂上さして白雪をふみわける感激にもある．雪にうまった夏道にこだわる必要はない．シールをつけた何本かのスキーが，同じペースで處女雪のあいだに新しく合理的なジグザグをきりひらいてゆく．

森林地帯をぬけると，まっ白な斜面がカッとひらける．吹きっさらしの北風が，雪煙をとばして，雪面にウズをまいている．頭をつっこむようにして，ジグザグを切りつづける．風の叫び声と，スキーをひきずってゆく音．あとは沈んだ銀一色．自然はしばしばこのあたりで，狂ったように急変することがある．冬の季節風のために，山の両側では天気がガラリと変わっているのだ．自然と人間とのきびしい対決がなおもつづけられる．

もうだいぶ高く登った．裸の斜面の雪はかたい．強い風は，雪の面にスカブラとよばれる美しいシマ模様をえがいている．寒さてひきつった顔をあげると頂上の鞍部が見えた．

頂　上　へ

➡ みんなだまって登ってゆく．登れば登るだけ，頂上が先へ逃げてゆくようないらだたしい錯覚．この寒気にもジットリと汗ばんてくる，最後の疲労．一休みして，もう一息だ．冷えると疲れるから，せなかに新聞紙などさしこんで，汗をふいておこう．

⬅ 頂上ちかくは，氷のようにかたい雪の斜面だ．強い風がふった粉雪を吹きとばす．青氷をはって前方にせりあがる山頂．スキーをぬいでアイゼンにはきかえる．スキーは流さないように岩かげにおく．まぶしいばかりの銀白．めまいがするような圧迫感．静寂．まっ白な息．アイゼンの鉄の歯がキシッキシッとかたい氷を，一歩一歩かんでゆく．

言葉にはいいつくせない頂上の感激をあとにして，いよいよ下りにかかる．危険な頂上附近は慎重にすべるが，やがて，スキーは雪の斜面に豪快なシュプールをえがいてゆく．

岩波写真文庫目録

1*木綿
2 昆虫
3*南氷洋の捕鯨
4*魚の市場
5 アメリカ人
6 アメリカ
7 雪の結晶
8 写真
9 レンズ
10*紙
11 蝶の一生
12 鎌倉
13 心と顔
14 動物園のけもの
15 富士山
16 積雪
17 いかるがの里
18 鉄
19 川—隅田川—
20 雲
21 汽車
22 動物園の鳥
23 様式の歴史
24 銅山
25 スイス
26 スキー
27 京都—歴史的にみた—
28 力と運動
29 アメリカの農業
30 アルプス
31 山の鳥
32 奈良の大仏
33 尾瀬
34 電話
35 野球の科学
36 星と宇宙
37 蚊の観察
38 長崎
39 高野山
40 正倉院(一)
41 彫刻
42 仏像
43*化学繊維
44 蛔虫
45 野の花—春—
46 金印の出た土地
47*東京—大都会の顔—
48 馬
49 石炭
50 桂離宮と修学院
51 日光
52 醤油
53 文楽
54 水辺の鳥
55 米
56 正倉院(二)
57*石油
58 千代田城
59 歌舞伎
60 高山の花
61 波
62 京都御所と二条城
63 赤ちゃん
64 オーストラリア
65*ソヴェト連邦
66 能
67*造船
68 東京案内
69 平泉
70 手術
71 宮島
72 広島
73 佐渡
74 比叡山
75 阿蘇
76 信貴山縁起絵巻
77 針葉樹
78 近代芸術
79 日本の民家
80 季節の魚
81 シャボテン
82 新劇
83 郵便切手
84 かいこの村
85 伊豆の漁村
86 奈良—東部—
87 奈良—西部—
88 ヒマラヤ
89 上高地
90*電力
91 松江
92 動物の表情
93 金沢
94*自動車の話
95 薬師寺・唐招提寺
96 日本の人形
97 システィナ礼拝堂
98 美人画
99 日本の貝殻
100 本の話
101 戦争と日本人
102 佐世保
103 ミケランジェロ
104 空からみた大阪
105*宗達
106 飛騨・高山
107 ゴッホ
108 京都案内—洛中—
109 京都案内—洛外—
110 写楽
111 熊
112 東京湾
113 汽車の窓から—東海道—
114 地図の知識
115 姫路
116 硫黄の話
117 伊勢
118 はきもの
119 隠岐
120 源氏物語絵巻
121 農村の婦人
122 出雲
123 アルミニウム
124 水害と日本人
125 日本のやきもの
126 貝の生態
127 イスラエル
128 伴大納言絵詞
129 瀬戸内海
130 飛鳥
131 聖母マリア
132 日本の映画
133 能登
134 山形県
135 福沢諭吉
136 利根川
137 鹿児島県
138 伊豆半島
139 日本の森林
140 高知県
141 チェーホフ
142 仏教美術
143 一年生
144 長野県
145 塩原
146 日本の庭園
147 木曽
148 忘れられた島
149 近東の旅
150 和歌山県
151 函館
152 豆
153 大分県
154 死都ポンペイ
155 富士をめぐる—空から—
156 神奈川県
157 柔道
158 戦争と平和
159 ソ連・中国の旅—桑原武夫—
160 伊豆の大島
161 ジョットー
162 熊野路
163 鳥獣戯画
164 愛媛県
165 やきものの町
166 冬の登山
167 埼玉県
168 男鹿半島
169 フランス古寺巡礼
170 滋賀県
171 白浜
172 東京国立博物館
173 千葉県
174 箱根
175 細胞の知識
176 四国遍路
177 村の一年—秋田—
178 セザンヌ
179 石川県
180 琵琶湖
181 仏陀の生涯
182 香川県
183 日本 -1955年10月8日-
184 練習船日本丸
185 悲惨な歴史—ドイツ—
186 ボッティチェリ
187 東海道五十三次
188 離された園
189 松島
190 家庭の電気
191 アメリカの地方都市
192 五島列島
193 塩の話
194 パリの素顔
195 横浜
196 日系アメリカ人
197 インカ
198 奈良をめぐる—空から—
199 子供は見る
200 雪舟
201 東京都
202 アフガニスタンの旅
203 渡り鳥
204 群馬県
205 ブラジル
206 ルーヴル美術館
207 北海道(南部)
208 小豆島
209 日本 -1956年8月15日-
210 富山県
211 毛織物の話
212 北海道(東・北部)
213 自然と心
214 空からみた京都
215 世界の人形
216 愛知県
217 諏訪湖
218 鉄と生活
219 山口県
220 麦積山
221 北京
222 江南
223 四川
224 広州—大同
225 室蘭
226 山水画
227 三重県
228 白山
229 鵜飼の話
230 島根県
231 小さい新聞社
232 北海道(中央部)
233 近代建築
234 岡山県
235 ねずみの生活
236 札幌
237 日本 -1957年4月7日-
238 広島県
239 北陸路
240 倉敷
241 ギリシアの神々
242 長崎県
243 水郷 -潮来-
244 福井県
245 秋吉台
246 子供の絵

新刊

247

248

249

*印は品切でございます